

2021 年 褥瘡・NST 給食委員会業務活動報告

褥瘡・NST 給食委員会委員長

宇野 智子

褥瘡チーム

大久保 絢香

西谷 美香



栄養科・NST

関川 由美



リハビリテーション科・SST

横田 奏平



はじめに

2021 年も医療界は新型コロナウイルス感染症に翻弄された一年だった。だが同時に、本邦でこれまで実現していなかった様々なシステムが取り入れられ、充実した年でもあった。Web 上での学会参加、発表が可能となり、大都市から離れて住む医療従事者としては非常に恵まれた環境が整備された。現地参加が必須であった研修会もリモートで単位が取得可能となり、様々な事情でこれまで参加が難しかった者への門戸も開かれた。

当院のチーム医療においても、SST の勉強会は Zoom を使用したりリモート開催とし、褥瘡・NST 研修会は院内 Web への音声付スライドを掲載する新たな形で再開し、これまで業務の都合上参加が難しかった職員へも情報を届けられるようになった。感染対策に留意しながら、各チーム活動も継続できた。総合的に見ると、コロナ流行前よりもさらに進歩した活動ができた復活元年でもあったように思う。

以下、2021 年の褥瘡チーム、NST、SST の業務活動について報告する。

1. 褥瘡チーム

1) 褥瘡発生状況

2021 年の褥瘡発生総数は 278 件、院内発生 169 件 (医療関連機器圧迫創傷: MDRPU 56 件)、院外発生 107 件 (MDRPU 2 件) であり (図 1-1)、褥瘡有病率は 3.63%、推定発生率は 2.17% であった (図 1-2)。日本褥瘡学会での 2019 年の病院全国平均では褥瘡有病率 2.46%、褥瘡推定発生率 1.20% (MDRPU 0.35%) と報告されている。細かな定義が違うため単純な比較検討はできない

が、当院は有病率が全国平均よりも高い結果となった。これは当院の褥瘡管理が全国と比べて劣っているということではなく、北海道地方都市の特徴として全国と比べて圧倒的に高齢独居者が多いということ、西胆振地域における総合病院で脳神経外科疾患での緊急入院可能な病院が当院のみであること、という二つの事柄が作用した結果、数字的バイアスがかかり平均より高くなってしまっているということをご理解いただきたい。

院内褥瘡発生部位では踵部と仙骨部がそれぞれ 22 件と最多であった。MDRPU の院内有病率は 0.66% と全国平均よりは多いものの、去年の 63 件から 56 件と減少し改善がみられた (図 1-1)。

また、今年の内発生は去年の 270 件と比較し減少した一方で院外発生は増加傾向にあった。これは高齢独居者が多い北海道地方都市としての特徴に相まってコロナ禍の影響で近隣住人と接する機会が乏しくなった等、これまで以上に高齢独居者の孤立化が進んだことが関連していると考えられる。

2) 褥瘡ハイリスク患者ケア加算

褥瘡ハイリスク患者ケア加算についてのデータを図

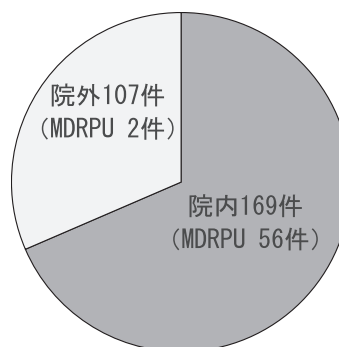


図 1-1 褥瘡発生状況

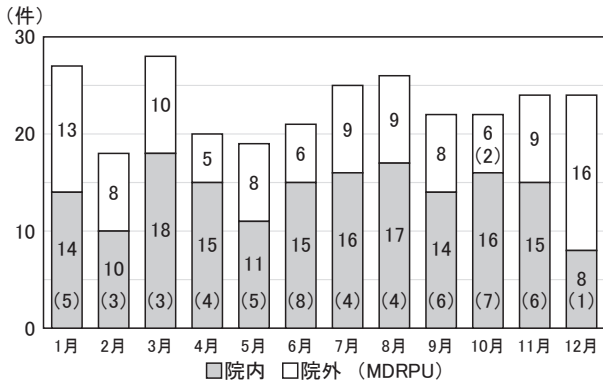


図 1-2 月別褥瘡発生状況

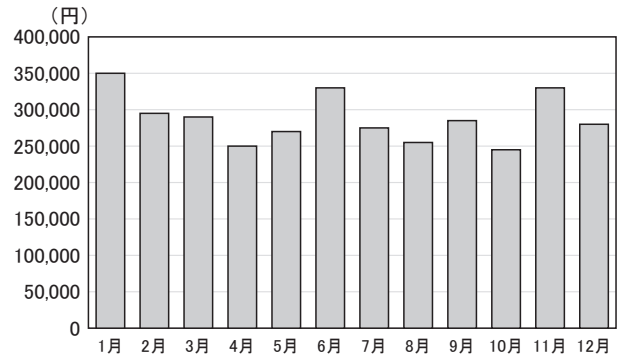


図 1-3 褥瘡ハイリスク患者ケア加算算定額 (延べ 691 件)

1-3 に示す。褥瘡ハイリスク患者ケア加算は 691 件（収益 3,455,000 円）算定し、昨年の 653 件と比較し増額となった。その内訳は褥瘡ハイリスク項目では特殊体位での手術が 56 件と最も多かった。

3) 取り組みと今後の展望

今年度も計 10 回褥瘡新聞を発行した（表 1）。仕事で忙しい職員にもより分かりやすく伝えることができるよう、表記方法にも工夫を凝らした。褥瘡チームから 2 演題の学会発表も行った（表 2）。今後も褥瘡チームで介入した症例について、積極的に地域、全国へと発信していく。さらに、新たな取り組みとして、新任医師向けに褥瘡チームの活動を周知することを目的に今年度より 4 月にオリエンテーションを実施した。研修医へも、研修医レクチャーの一環として、褥瘡回診に参加する機会を設け、褥瘡予防の啓発を行った。当院は医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、臨床検査技師、管理栄養士を含む多職種で構成された褥瘡チームで毎週回診を行っている。様々な視点を設けることで褥瘡の早期発見に努めるとともに、カンファレンスで事例の原因分析

を行うなど対応策を講じることで看護スタッフを中心とした褥瘡管理への「感度」を高めることを意識的に追求しており、その結果が今年の MDRPU 発生数の減少につながったと考える。今後も多職種とも連携と情報共有を図り、褥瘡予防に努め、新規の発生減に取り組んでいく。

2. NST

1) 介入症例

2020 年はコロナ禍による入院患者数減少もあり、NST 依頼数も一時的に減少が見られたが、2021 年は過去最高の 237 名の新規 NST 依頼があった（図 2-1）。回診回数も例年と変わらずの計 98 回、延べ 1006 名に栄養介入を行った（図 2-2）。2020 年度診療報酬改定により、加算対象となった精神科病棟の加算件数は 2020 年 4 月からの 9 ヶ月で 70 件、1 ヶ月平均 7.8 件、2021 年は年間 107 件、1 ヶ月平均も 8.9 件と増加している。また週 2 回の回診により退院や転院前におけるタイムリーな回

表 1 褥瘡新聞

発行月	タイトル	作成者
1 月	軟膏使用の際の注意点	薬剤師 安住 匡人
2 月	半側臥位について	作業療法士 吉田 直樹
3 月	タンパク質について	管理栄養士 早坂ゆかり
4 月	鉄のお話	臨床検査技師 三室 有瑠
5 月	おむつ使用時の予防的スキンケア	皮膚・排泄ケア認定看護師 西谷 美香
6 月	フィブラストスプレー® の紹介	薬剤師 安住 匡人
7 月	休刊	
8 月	側臥位のポジショニングのコツ	作業療法士 吉田 直樹
9 月	アルジネード？アルジネードウォーター？	管理栄養士 藤原 玲奈
10 月	褥瘡患者の微量元素測定数は意外と少ない?!	臨床検査技師 菊地 穂菜 神長 優
11 月	水曜日 14 時は褥瘡チーム回診	皮膚・排泄ケア認定看護師 西谷 美香
12 月	休刊	

表2 業績集

1. 大久保絢香, 高木美穂, 西谷美香, 吉田直樹, 谷口奈恵子, 林 元子, 安住匡人, 宇野智子, 小川宰司, 大山浩史, 上川康友: 長時間の同一姿勢が誘因となって横紋筋融解症を合併した coma blister の1例. 第23回日本褥瘡学会学術集会 (2021年9月10-11日 Web開催)
2. 高木美穂, 西谷美香, 谷口奈恵子, 林 元子, 三室有璃, 安住匡人, 大久保絢香, 宇野智子, 小川宰司, 宮崎義則, 上川康友: 長期的チーム介入により踵褥瘡が治癒した1例. 第23回日本褥瘡学会学術集会 (2021年9月10-11日 Web開催)
3. 横田奏平, 宇野智子, 岩本高始, 小野寺馨, 三上貴寛, 城前有紀乃, 吉田剣一, 関本一貴, 浅野由美子, 中村琢臣, 菊地利枝, 佐々木賢一: 当院摂食嚥下支援チームの取り組み. 第36回日本臨床栄養代謝学会学術集会 (2021年7月21-22日 神戸 ハイブリッド開催)
4. 早坂ゆかり, 関川由美, 平岡彩子, 林 元子, 星野裕子, 城前有紀乃, 浅野由美子, 古内久美子, 吉田倫子, 横田奏平, 前田有一郎, 宇野智子, 小野寺馨, 佐々木賢一: 進行食道癌に対し栄養管理を行った2症例報告. 第13回日本臨床栄養代謝学会北海道支部学術集会 (2021年6月5日 Web開催)

診は、介入件数増に繋がっていると評価する。

NST 加算の算定数は、延べ722件、1,444,000円の収益で、前年比105.6%であった(図2-3、図2-4)。依頼科は外科が78名(32.9%)、次いで前年度最多であった呼吸器内科が67名(28.3%)、消化器内科30名(12.7%)、精神科26名(11.0%)であった(図2-5)。NST介入患者の多くはがん患者であり、外科、消化器内科では周術期の栄養管理、呼吸器内科は入院化学療法患者への栄養管理となっている。また精神科においては摂食不良患者

への栄養介入が多く見られた。

2) 取り組み

① NST NEWS

当院は経腸栄養における誤接続防止コネクタの導入を2021年5月より施行しているが、これに伴い誤接続防止コネクタに関する通信を年4回発行し、院内周知に努めた。また、薬剤師と臨床検査技師によるNEWSを含め、総発行回数は年間6回であった。(表3)。

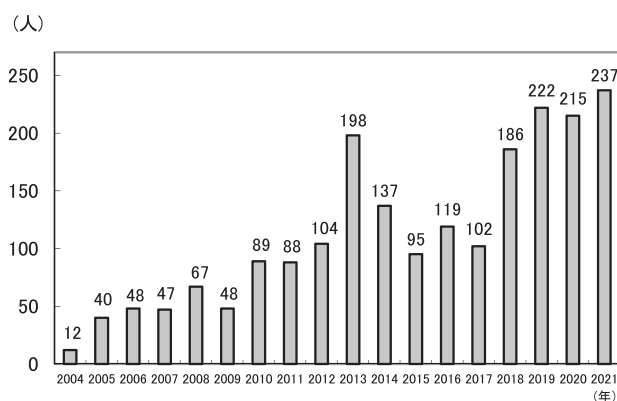


図2-1 年別新規依頼患者数推移 (総計 2054名)

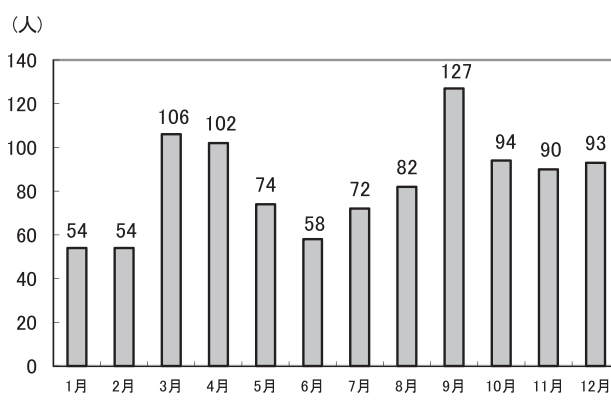


図2-2 月別NST回診人数 (延べ1006名)

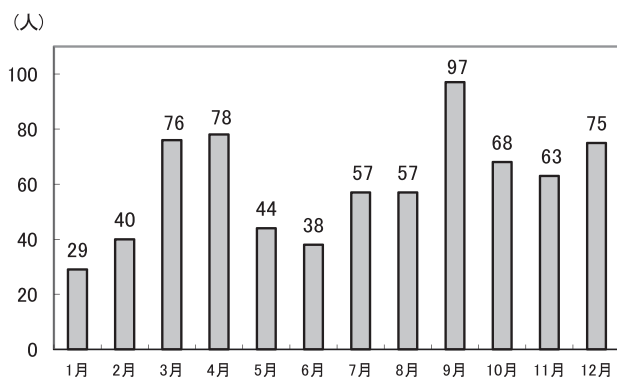


図2-3 月別NST加算算定数 (延べ722件)

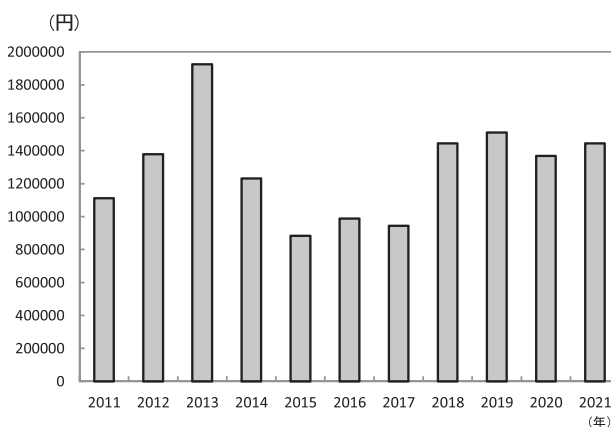


図2-4 NST加算算定額の推移

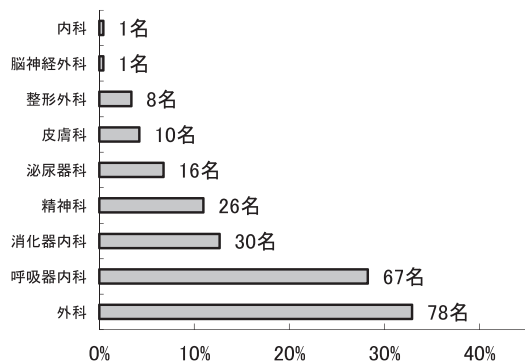


図 2-5 科別新規依頼患者数

② NST・褥瘡合同研修会

2021 年は前年の院内 Web による紙面開催から発展し、動画配信による研修会を中心に、外部講師による外部との Web 講演も開催するなど、コロナ禍 2 年目として、新たな研修会の在り方を模索した 1 年であった (表 4)。

③ NST 関連認定教育施設としての教育活動

例年、日本臨床栄養代謝学会 (旧 日本静脈経腸栄養学会) の NST 専門療法士実地修練認定教育施設として、さらに日本栄養士会の栄養サポートチーム担当者研修認定教育施設として、道内から実習生を受け入れてきた。しかしコロナ禍において 2020 年は未開催であったが、2021 年は日本栄養士会からの依頼により、栄養サポートチーム担当者研修を、感染対策を施行し実施した。当院 2 名と道内 2 名の計 4 名の受け入れを行った。今後も地域の NST 専門療法士および栄養サポートチーム担当者の輩出に貢献していきたい。

3) 学会活動

日本臨床栄養代謝学会学術集会で 1 演題、同じく日本臨床栄養代謝学会の北海道支部学術集会で 1 演題の発表を行った。例年より少ない実績ではあったが Web 発表という新しい発表形式であった (表 2)。今後も当院のチーム医療活動について積極的に北海道、日本全国の医

表 3 NST NEWS

	発行月	タイトル	作成者	
第 41 号	1 月	経腸栄養製品のコネクタが変わります	看護師	古内久美子
第 42 号	4 月	ドレナージはどうするのか? 問題	看護師	古内久美子
第 43 号	4 月	誤接続防止コネクタトライアル報告	看護師	古内久美子
第 44 号	4 月	誤接続防止コネクタ運用開始	看護師	古内久美子
第 45 号	8 月	ONS (オーエヌエス) で食べる楽しみを作ろう!	薬剤師	浅野由美子
第 46 号	10 月	CONUT 法/CONUT 変法のご紹介	臨床検査技師	菊地 毬菜

表 4 NST・褥瘡合同研修会

	開催月	内容	講師		備考
第 44 回	2 月	経腸栄養製品のコネクタが変わります	看護師	古内久美子	対面・紙面
第 45 回	3 月	褥瘡チームは見た!	皮膚・排泄ケア認定看護師	西谷 美香	紙面
第 46 回	4 月	サルコペニアの摂食嚥下障害 ディスフェイジア	言語聴覚士	横田 奏平	動画
第 47 回	5 月	とっても残念な褥瘡ケア~ちょっぴり役立つスキルとアート~	医療法人 廣仁会 札幌皮膚科クリニック	阿部 正敏	Web・紙面
第 48 回	6 月	GLIM criteria とは? ~低栄養を学び直す~	外科・消化器外科	宇野 智子	動画
第 49 回	7 月	学会活動報告 ・当院摂食嚥下支援チームの取り組み (日本臨床栄養代謝学会学術集会)	言語聴覚士	横田 奏平	動画
		学会活動報告 ・進行食道癌に対し栄養管理を行った 2 症例報告 (日本臨床栄養代謝学会 北海道支部学術集会)	管理栄養士	早坂ゆかり	動画
第 50 回	8 月	プロバイオティクス・プレバイオティクス	株式会社 明治	三木 彩愛	Web
第 51 回	9 月	サルコペニア・フレイルと摂食・嚥下障害	摂食・嚥下障害看護認定看護師	岩本 高始	動画
第 52 回	10 月	NST って...?	看護師	中田 知美	動画
第 53 回	11 月	静脈栄養の概要	薬剤師	安住 匡人	動画

療施設へ向けて発信していきたい。

3. SST

摂食嚥下支援チームが院内のチームとして正式に発足したのは、2019年9月であり、もうすぐ2年半が経とうとしている。チームが発足してからすぐにCOVID-19の本格的な流行がみられ現在に至るまで感染対策に追われながらの活動を余儀なくされているが、一方で2020年の診療報酬改定にて摂食嚥下支援加算（多職種で構成される摂食嚥下支援チームで介入することで、摂食機能療法に上乗せできる加算）が新設されるなど、摂食嚥下障害に対してチームで治療にあたることの重要性は強く認識されるようになってきている。

それぞれ多忙な業務を抱えながら、チーム医療として回診やカンファレンスを続けることは容易ではないが、患者さんが経口摂取できるか否かというのは予後を左右する重要なファクターである。特に嚥下障害に対しては、「嚥下造影検査（VF）や嚥下内視鏡検査（VE）などの画像所見も含めて適切な評価を行ったうえで多職種の情報を共有し、意見を集約しつつ方針を決めて実行に移していく」という過程がよりスムーズに行えることが重要で、そのためには多くの人の協力が不可欠である。

上記を踏まえつつ、今年度は院内の啓発活動や環境調整にも力を入れてきた。以下に、SST活動実績として報告する。

1) 活動報告

① 回診およびカンファレンス

チーム立ち上げ当初から、個別に依頼のあった患者さんに対しては治療の指導・提言を行うという形で介入している。患者さんの状態を確認して方針を検討するために、週に1回の回診・カンファレンスは今年度も継続す

ることができた。

ただし、院内のPhaseが3B以上になった場合は、院内のPhase別対応サマリーに基づいて回診・カンファレンス共に中止とした。

② 嚥下新聞の発行

院内スタッフへの啓発もかねて、嚥下新聞として表5の通り発行している。

③ Webを用いた勉強会の開催

例年行っている勉強会は、COVID-19の感染拡大に伴い、今年度からWebを用いたオンライン形式に統一して行っている。「SSTミニ勉強会」と題して6回開催した（表6）。

④ その他の研修会等

病棟からの依頼で、看護師向けの勉強会を2件行っている。また、例年院内で行われている研修医セミナーについても嚥下についてお話しして欲しいと依頼があり、対応している。

⑤ 摂食機能療法の算定

摂食嚥下障害について治療介入を行うことで算定できる。NST主導のもと、ほとんどを病棟看護師で算定しており、SSTで管理・報告を行っている（図3-1）。

また、年度別でみると、2018年度の診療報酬改定で算定要件が変更になり一時期落ち込んでいた件数が、徐々に回復してきていることがわかる（図3-2）。

⑥ 学会活動

第36回日本臨床栄養代謝学会学術集会にて「当院摂食嚥下支援チームの取り組み」という演題で発表している（表2）。コロナ禍ということもありWebでの参加となったが、当院でのSSTの取り組みを全国学会で紹介できたことは、当チームにとっては大変意義深いことであった。

表5 嚥下新聞

	発行月	内容	作成者
第7号	4月	口腔ケアと肺炎	言語聴覚士 横田 奏平

表6 SSTミニ勉強会

	開催月	内容	講師
第4回	4月	誤嚥性肺炎と衛生	言語聴覚士 横田 奏平
第5回	5月	食事介助のちょっとしたコツ	摂食・嚥下障害看護認定看護師 岩本 高始
第6回	7月	サブスタンスPから考える摂食嚥下障害	言語聴覚士 横田 奏平
第7回	8月	義歯と嚥下 嚥まなければ必要ない？	言語聴覚士 中田 周作
第8回	9月	嚥下調整食について	管理栄養士 城前有紀乃
第9回	11月	作業療法士が行う食事動作の評価と介入方法	作業療法士 関本 一貴

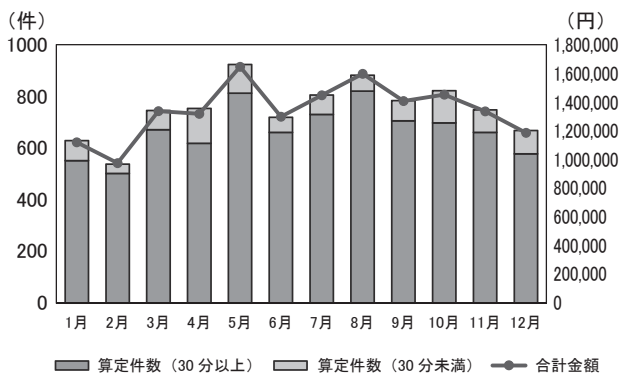


図 3-1 月別摂食機能療法の推移

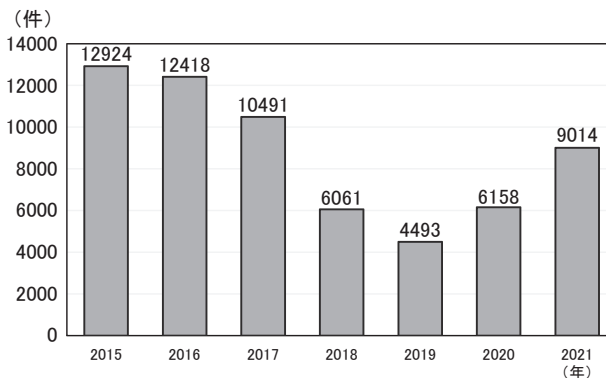


図 3-2 年間摂食機能療法算定件数の推移

2) 来年度の展望

適切な評価を行い、評価の結果を多職種で参照しながら方針を決める。決めた方針に基づいて治療を進める。文章にすると当然のことのように感じるが、実行しようとするとハード面、ソフト面ともにいくつもの課題があることが分かる。特にコロナ禍においては、カンファレンスや回診なども安易に行うことができず、検査や摂食訓練なども、常に飛沫のリスクが伴う。これらの感染対策も併用しながら、院内の摂食嚥下障害の治療がより効果的に行える環境を整えていくためには、課題が山積していることは否めない。

結局は一つずつ解決しながら、進めていく他ないのだろう。チームで知恵を絞りつつ、摂食嚥下障害で苦しむ患者さんの治療に貢献していけるよう、今後も努めていきたい。

おわりに

この原稿を仕上げている 2022 年 1 月現在、まだ世間ではオミクロン株が猛威を振っている。しかし、昨年の時点では全く見えなかった、コロナ禍の終焉を告げる光がわずかな隙間から入りつつある気配を感じる。

医療に限らない話だが、時代に変革が起きた際には、ただそれを嘆くのではなく、変化に柔軟に対応した者が生き残る。コロナ禍だけではない。これからの室蘭の医療には、人口減少、さらなる高齢化に伴う地域全体としての様々な変化が待ち受けている。当院の褥瘡チーム、NST、SST も、患者さんを第一に考える視点はぶれることなく、時の流れを敏感にキャッチし、より柔軟な考えを持ち、新たな取り組みを進めていきたい。